

大学史ニュース

第14号

2018年3月5日 発行

目 次

展 示

◇企画展「神田学生街の記憶」について…………… 2

調査報告

- ◇戦時中の水泳部員河野通廣氏からの聞き取り…………… 3
- ◇ジャーナリスト山本實彦の調査について…………… 4
- ◇学徒兵笠原喜四郎氏からの聞き取り…………… 5
- ◇日本法律学校講師今村信行について…………… 6

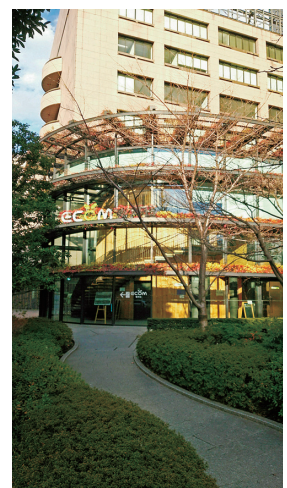


ECOM駿河台で神田学生街の企画展を開催

1月9日から2月28日まで、御茶ノ水の三井住友海上火災保険株式会社の展示施設ECOM駿河台で企画展「神田学生街の記憶—1880—1980 五大法律学校の軌跡—」を開催しました。

私法律学校として産声を上げた神田ゆかりの専修、中央、日本、法政、明治の5大学の大学史担当部署が所蔵する写真から、神田学生街100年のあゆみを紹介しました。

展示会場は、以前は中央大学駿河台キャンパスがあった場所であり、学生街ゆかりの地で大学連携展示を開催することができました。本企画展にご協力をいただきました三井住友海上火災保険株式会社及びECOM駿河台の関係者の皆様に御礼申し上げます。



企画展「神田学生街の記憶」について

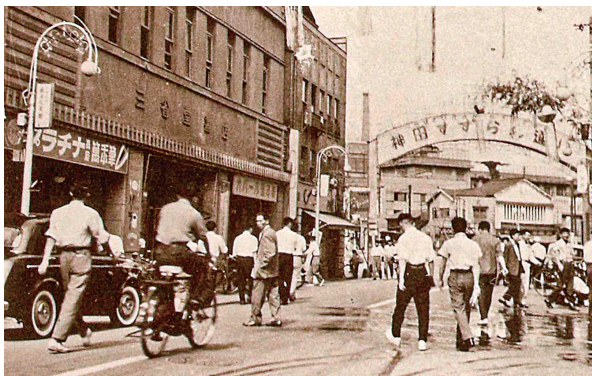
前頁で紹介した通り、1月9日から2月28日まで、ECOM駿河台において企画展「神田学生街の記憶 —1880—1990 五大法律学校の軌跡—」を開催しました。主催は専修大学大学史資料課、中央大学大学史資料課、日本大学企画広報部広報課、法政大学史センター、明治大学史資料センターで、会場を提供していただいた三井住友海上火災保険株式会社との共催でした。このような大学間連携展示は、2014年に企画展「近代日本の幕開けと私立法律学校 —神田学生街と法典論争—」を明治大学博物館特別展示室で開催しましたが、今回は2回目となります。

今回の企画展では、①神田と学生写真、②航空写真、③明治中期の神田写真の3パートに分けて展示しました。神田と学生写真では、明治期から昭和50年代までの神田学生街の写真の時代ごとに分けて、パネルを製作しました。ここで掲載した写真は主に、各大学が所蔵する卒業写真帳などから抽出しましたが、「ニコライ堂」「すずらん通り」「神田古書店」については、どの大学にも多くの写真が残されていました。学生にとっての神田の思い出の場所は、時代を超えて変わる事が無いことを改めて知ることができました。

航空写真については、各大学が所在する駿河台、水道橋、九段下、市ヶ谷地域を展示しました。駿河台については、本学の他に明治大学、中央大学が所在するため、各大学の建物を比較することで航空写真の年代判別が容易でした。これも、複数の大学で展示したことのメリットだと思います。

明治中期の神田写真は、中央大学図書館所蔵の『明治二十一年撮影 全東京展望写真帖』をパネルで展示しました。ニコライ堂建設時の足場から撮影されたこの写真帖は、明治24年の神田大火以前、つまり江戸時代から続く神田の景観が撮影されている貴重な写真です。

神田学生街とは、一般的には旧神田区域の西側部分を指します。現在でいえば西は水道橋・一ツ橋から、東は御茶ノ水・神田錦町付近までの地域です。この辺りは明治期には下宿屋が多く、学生も数多く暮らしていました



すずらん通り（昭和30年代）明治大学史資料センター蔵

が、生活の実態を示す資料が少なく詳しいことはあまりわかっていないのが現状です。明治期に多くの学校が密集していた神田学生街を把握することは、本学の歴史に限らず明治期の高等教育を考える上でも重要なテーマです。日本大学にもゆかりの深い神田学生街について、今後も各大学と連携を取りながら、資料調査を進めていきたいと思っています。

(松原)



航空写真・水道橋（昭和20年代）中央が本学経済学部校舎



戦時中の水泳部員河野通廣氏からの聞き取り

平成29年12月5日、戦時中の本学水泳部員河野通廣氏からの聞き取り調査を実施しました。河野氏は、大正9（1920）年に鹿児島県の始良（現始良市）^{あいら}に生まれ、現在97歳です。小学校時代から水泳を始め、県下の大会の背泳ぎで5年次に第3位、6年次には優勝し、以来背泳ぎが専門種目となりました。加治木中学時代には全国中等学校水上競技大会で第2位の成績を収めました。

大学進学に際しては、複数の大学の水泳部から勧誘を受けましたが、最も条件の良かった日本大学を選び、昭和13（1938）年4月に予科文科に入学、予科修了後は商経学部経済学科に進みました。

この頃の日本大学水泳部は、葉室鐵夫（ベルリン五輪金メダリスト）、村上勝芳（後の監督）を中心に、強豪早稲田・慶應義塾の打倒に燃え、多くの有望選手が集まっていました。同期生には天野富勝、鷺谷光明、越戸優一、原保夫などがおり、いずれも全国中等学校大会で好成績を収めた選手でした。なかでも天野は、日本大学在学中に1,500m自由形で世界記録を樹立しています。



河野通廣氏

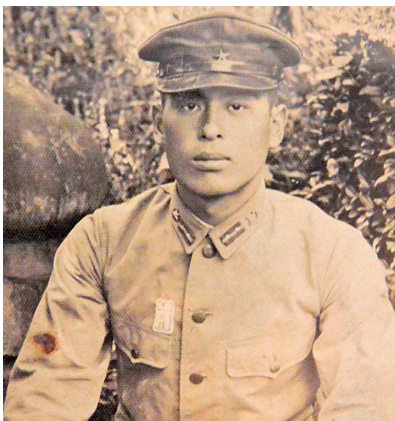


当時の日大水泳部員、前列右端が河野氏



力泳する河野氏

練習は厳しく、1日に1万mから1万5,000mほど泳ぎ、選手間の競争も激しいものでした。その反面部内の上下関係は緩やかで、合宿生活は楽しく過ごすことができ、天野とは渋谷で飲み歩いたこともありました。



熊本予備士官学校時代

河野氏は三大学対抗水上競技大会（日本・明治・立教）、日本学生選手権（インカレ）、全日本選手権大会、日米対抗戦などで活躍しましたが、最大の目標は、昭和15年に開催予定の東京オリンピックに出場することでした。しかし、日中戦争の影響でオリンピックが返上されると、一時練習に身が入らなくなるほどショックを受けました。

昭和16年に太平洋戦争が始まると、勤労動員が多くなり、水泳部員が三越デパートの配達を行ったこともありました。学校教練は代々木練兵場、富士の裾野、習志野などで行われ、試合と重ならない限り参加しました。

昭和17年9月に繰り上げ卒業となり、卒業式では、水泳競技で優秀な成績を挙げたことにより表彰されました。同年10月1日に都城の歩兵第23連隊に入隊しました。3ヶ月の訓練を受けた後、幹部候補生として熊本予備士官学校に入学しました。この時の入学者の中に野球の川上哲治や柔道の吉松義彦がいました。19年に同校を卒業し中支（華中）に派遣され、ビルマからの陸路（鉄道）による石油の輸送作戦に従事しているところで終戦を迎えました。

昭和21年に復員し、始良町の農業協同組合に勤めていましたが、ロサンゼルス^{せんざい}の全米選手権から帰国後、鹿児島島に来訪した古橋廣之進の勧めにより、水泳を続けるため鹿児島市の信用金庫に転職しました。以来、国体に出場するなど長く水泳を続けました。なお、ここで掲載した日本大学と熊本予備士官学校時代の写真は、河野氏所蔵のものです。
(小松)

ジャーナリスト山本實彦の調査について

昨年12月、ジャーナリスト山本實彦^{せんざい}について、出身地の薩摩川内市で調査を実施しました。山本は、大正・昭和戦前期の思想界・文学界に一大旋風を巻き起こした人物として有名ですが、明治37（1904）年の上京後、38年から41年頃に日本大学で学んでいます。「門司新報」主筆、「やまと新聞」特派員、東京毎日新聞社長を経て、大正8（1919）年に改造社を設立しました。そこで山本が主宰した『改造』は、社会問題・労働問題を扱った論文のみならず、文芸欄の小説・詩も読者の心を掴み、総合雑誌として、戦前の言論界の中心的雑誌に成長しました。また、関東大震災後に一般読者が読む書籍が不足したことから、15年から刊行を始めた『現代日本文学全集』（全63巻）は、「円本」（1冊1円）ブームの先駆けとなっています。さらに、政治家として川内川の改修など郷里の発展にも尽くしています。一方、日本の文化の発展のため、アルベルト・アインシュタインやバートランド・ラッセル等世界的文化人を日本に招聘しています。なかでも、大正11年に来日したアインシュタインは、日本各地で熱狂的な歓迎を受けました。

川内まごころ文学館は、山本の遺族から寄贈された著名作家の直筆原稿・書簡など多くの資料を所蔵し、山本の足跡や『改造』に執筆した作家の資料を展示しています。山本の関連史蹟としては、大小路町に「生誕の地碑」、母校の亀山小学校には、直筆の「百難克服の碑」（昭和29年建立）、泰平寺には山本家の墓所があります。「百難克服の碑」は、世界的視野を持ち、独創的なジャーナリスト・事業家・政治家でありながら、浮き沈みの激しかった山本の人生を象徴するものでした。



山本實彦の展示（川内まごころ文学館）



百難克服の碑



山本實彦生誕の地碑
(次女・五味松心の筆)



山本家の墓所と實彦の墓

学徒兵笠原喜四郎氏からの聞取り



聞取り時の笠原氏
(平成29年7月4日 撮影)

平成29年7月4日と18日、学校法人駒場学園理事長の笠原喜四郎氏に聞取り調査を実施しました。笠原氏は、大正14（1925）年に長野県諏訪郡平野村（現岡谷市）に生まれ、長野県岡谷工業学校（現岡谷工業高等学校）を卒業し、昭和18（1943）年4月に日本大学専門部法律科に入学しました。

在学中は、文官高等試験合格を目指して勉学に励みました。昭和19年4月に海軍飛行専修予備生徒の試験を受けて合格、7月に徴兵検査を受けた後、三重海軍航空隊に入隊しました。しかし、飛行適性が不合格となり、さらに体調を崩したため、生徒を罷免され、実家に戻ることとなりました。

同年11月、召集されて富山の東部35部隊に入営。1週間ほどしてから、博多、朝鮮半島経由で中国大陸に渡り、独立混成第1旅団独立歩兵第74大隊に配属され、各地を転戦しました。部隊は、終戦後も国民党軍の依頼で警備任務などに当たり、21年4月に復員しました。

さっそく、大学の事務局に赴き確認したところ、専門部の卒業単位は取れていたため、授業料の不足分を支払って、卒業証書を受け取りました。進学の相談をすると、数日後に1人で試験を受けることとなり、法文学部法律学科に合格しました。昭和21年度の授業は、6月から開始されました。

昭和22年度からは、沼義雄教授の民法のゼミに所属。23年度に開催された、日本・明治・中央・早稲田・慶應・法政・専修の7大学が参加した関東学生法学連盟法律討論会で、笠原氏は法政大学と日本大学開催の討論で1位となり、日本大学の年度優勝に貢献しました。ただし、開催校は優勝できないとの不文律があり、日本大学での公式結果は2位となっています。ここに掲載した写真は、日本大学で開催した討論会での笠原氏で、同氏所蔵の「昭和24年度 日本大学法文学部卒業記念帖」（法律学科・政治学科）に所収の2葉です。

昭和24年3月に卒業（優等賞状授与）の後、日本大学助手となり、同年8月の司法試験を受験し合格しました。司法研修所の所長に許可を貰い、助手を続けながら司法修習生を2年間務め、27年4月、検事に任官しました。

昭和32年1月に検事を辞職し、翌月笠原法律事務所を開設しました。33年3月、学校法人駒場学園の顧問となり、6月には理事に就任しています。駒場学園高等学校は、装

蹄師養成を目的に、昭和22年に創立した日本装蹄学校を前身としています。校長には、初代松葉重雄・2代木全^{きまた}春生・3代大森智^{ちかみん}堪と、現職の日本大学農獣医学部（前身の東京獣医畜産専門学校・東京獣医畜産大学の時期も含



昭和23年度関東学生法学連盟法律討論会での笠原氏



法律討論会の賞状・トロフィーと
(前列中央笠原氏)

む) 教授が就任していた関係もあって、笠原氏は、農獣医学部や日本大学鶴ヶ丘高等学校の法律問題の処理にも関わり、39年4月から23年間、日本大学講師も務めています。

聞き取り内容の詳細は、来年度刊行予定の当課刊行物に掲載いたします。

(高橋)

【参考文献】

笠原喜四郎『菱の実のように』(平成4年5月)

日本法律学校講師今村信行について

今村^{のぶみち}信行は、日本法律学校創立以来、「民事訴訟法」担当の講師として長く教鞭を執った人物です。今村に限ったことではありませんが、創立期は資料が少ないために不明な部分が多く、講師たちの経歴なども判明した職歴を中心に記述されることになります。

今村は長野県下伊那郡高森町(信濃国下伊那郡山吹村)の出身で、現在は高森町の公式HPに「高森町出身の有名人」の一人として写真とともに経歴が載せられています。その経歴に、これまで把握していなかった幾つかの事柄があり、高森町歴史民俗資料館「時の駅」に問合せ後、調査を実施しました。同館松上清志館長から提示された資料に『下伊那郡誌資料』があり、「今村信行」のタイトルでその生涯が語られていて、興味深い記述もあります。

今村家は、江戸時代、幕府旗本座光寺家の家臣でした。今村は弟揆一郎とともに、一時期母方の祖父湯山賢輔(医師)に養われたのですが、弟はそのまま残って医学を学び、慶応年間に江戸に出て幕府の医学所(東京大学医学部の前身)でさらに研鑽を積みました。そこで頭取の松本順(良順)と知り合い、その姉婿三沢良益の婿養子となって三沢氏を継ぎました。医学研鑽のため長崎に遊学しますが、時まさに維新動乱期で、勤王の志士に感化され奔走したといひます。揆一郎は、明治維新後は外国官の権判事として三沢元衡と改名し、のち判事に進みました。



高森の人
今村信行

高森町教育委員会『高森の人』

一方、今村は、同じく勤王派であった主君座光寺の命で奔走したといひますが、明治維新後は、ヨーロッパの情勢が知りたくて横浜へ出ます。そして、林^{ただす}董(叔父。佐藤泰然の子で、実弟三沢元衡の義母さきはの弟)の紹介で、米国の医師で宣教師のジェームズ・ヘボン(ヘボン式ローマ字考案者)に出会います。そこで、不平等条約の解決には法制度の完備が必要であるから法律を学んだらどうかと諭されて法律家を目指すことを決め、また、義妹(揆一郎の妻の妹)の夫箕作麟祥がフランス法典の翻訳をしていると知り、借用してすべて写したといひます。

母の死去で一旦は帰郷した今村が、司法官を目指して東京に出たのは明治5年頃のことでした。司法省が設立されて間もなく、今村は面識のあったという児島惟謙の知遇を得て司法省13等出仕・東京裁判所詰を命ぜられ、次

いで権少解部ときべ（訴訟担当職員）となりました。

明治6年の「官員録」の司法省の部を見ると、今村は出世して10等出仕・権中解部に名前があります。この時点で司法省には権大内史箕作麟祥、中録三好退蔵、同松岡康毅、権中判事西成度、少判事兒島惟謙等、後の今村と日本法律学校に関わる人物たちがいました。

この後、今村は明治7年、三好退蔵が山梨裁判所長に転じるときに請われて同裁判所詰になり、9年に兒島惟謙が名古屋裁判所長として赴任するとき、やはり請われて名古屋裁判所詰となり、このとき判事に昇進したといえます。

三好は、大審院判事時代、伊藤博文の憲法調査に同行してドイツなどを視察しますが、ベルリン滞在中に三好の調査の手伝いをしていたのが、創立者の一人本多康直でした。後年、日本法律学校が開校し教鞭をとっていた今村と本多康直が共同で執筆したのが『民事訴訟法註解』です。

明治14年、東京勤務を希望した今村は、三好退蔵に嘆願し、兒島惟謙の斡旋もあって東京上等裁判所判事に転じます。所長は西成度でした。

明治17年から、訴訟規則取調委員会が設置され、御雇外国人の法学者ヘルマン・テッヒョー起草の民事訴訟法案の検討が進められますが、今村は南部甕男・栗塚省吾・本多康直らと委員に任命されました。委員長は、伊藤博文の憲法調査に同行し、帰朝後司法少輔となっていた三好退蔵です。続いて明治20年、山田顕義司法大臣を委員長とする法律取調委員会が設置され、今村は法律取調報告委員に任命されます。

明治23年、今村は東京控訴院（民事）部長に転じますが、控訴院長は松岡康毅でした。

このように、本書に登場した山田顕義をはじめ箕作麟祥・兒島惟謙・西成度・南部甕男・松岡康毅は日本法律学校創立時の評議員に名を連ねる人物たちです。

『下伊那郡誌資料』では、今村がこれらの人物たちと関わる内容に、その時点での個々人の肩書きが年代的に合致しない部分などがあって、そのまま記述することはできませんが、日本法律学校創立期に講師になった（招かれた）背景に、おそらく予想される人的繋がりがあったことを、資料的に確認できるものといえるでしょう。

（田淵）

全国大学史資料協議会2017年度総会ならびに全国研究会

平成29年10月11日～13日、愛知大学豊橋キャンパスで全国大学史資料協議会2017年度総会ならびに全国研究会が開催されました。総会終了後には、平松礼二愛知大学名誉教授の記念講演「国際教養としての日本美学」があり、その後特別展会場に移動してギャラリートークが行われました。



ギャラリートークで作品を解説する
平松礼二氏

12日の全国研究会は「新制大学発足をめぐる各大学の動向」と題し、立教学院展示館豊田雅幸氏の基調報告があり、その後、新制大学発足期の具体的事例について6名の報告がありました。

最終日の見学会では、藤田佳久愛知大学名誉教授等のご案内で、羽田八幡宮、田原市博物館、豊川稲荷などを見学しました。3日間にわたり、学内・学外の関連史跡を会場校の愛知大学の皆様にご案内していただき、総会・研究会だけではなく、見学についても充実した大会となりました。



愛知大学公館見学

大学史に関する情報については下記までお寄せください

日本大学企画広報部広報課（大学史） E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

活動報告

2017年4月～2017年9月

（大学史に関する活動）

○調査研究等

- 4月22日 創立者樋山資之関係調査（豊島区染井霊園）
- 5月18日 駒場学園高等学校での聞き取り調査（世田谷区）
- 6月2日 全史料協関東部会総会（群馬県立文書館）
- 6月8日 全国大学史資料協議会東日本部会総会（淑徳大学）
- 6月22日 金子堅太郎関係資料調査（神奈川県葉山町）
- 6月29日 工学部及び周辺地域の戦争遺跡調査（福島県郡山市）
- 7月4日・18日 学校法人駒場学園笠原喜四郎理事長聞き取り調査（世田谷区）

○展示

- 4月～6月 日本法律学校期の資料について（日本大学会館2階）
- 7月16日 商学部オープンキャンパス「日本大学を知ろう～学祖山田顕義を学ぶ～」展
（同学部3号館2階講堂前フロア）
- 7月～10月 医学部草創期—専門部医学科関係資料—（日本大学会館2階）

○講演・報告

- 4月7日 日本大学理工学部 大学史講演（同学部船橋校舎スポーツホール）
- 4月11日 日本大学東北高等学校 学祖講演（磐梯熱海温泉「華の湯」）
- 4月13日 日本大学豊山中学校 学祖講演（同校アリーナ）
- 5月11日 日本大学鶴ヶ丘高等学校 学祖講演（同校体育館）
- 5月24日 日本大学豊山高等学校 学祖講演（同校アリーナ）
- 6月13日 日本大学スポーツ科学部 大学史講演（同学部1号館1310教室）
- 7月14日 日本大学危機管理学部 大学史講演（同学部1号館1310教室）

日本大学大学史ニュース

第14号

2018年3月5日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 文成印刷